

M-1 オープニング

静かな奉納剣舞。

そこに降り注ぐ祝詞の声。

「たかあまはらにかむづまります。すめらがむつかむろぎかむろみのみこともちてやほよろづのかみたちを。かむつどへにつどへたまひ・・・」

巫女たちを切り捨てていく謎の影（壱与）。

殺陣1

●転換

◇其の一

渋谷109前。行き交う人々。待ち合わせ風の都会の人々。

白杖を手に月代との待ち合わせ場所に歩いてくる不安げな花海。

花海「すみません、渋谷109ってどこですか？」

ギャル1「あ？何言ってるの？あんたの目の前じゃん」

花海「あ、そうなんですか？良かった、着いた」

ギャル2「なにあんた、目見えないの？」

花海「うん」

ギャル2「へえ、気をつけなよ。じゃね。いこ」

ギャル1「ばいばい」

花海「ばいばい」

月代が来る。

月代「花海！」

花海「あ、月代」

月代の声に歩き出したところをカッブルにぶつかり白杖を落とす花海。
慌てて駆け寄る月代。無視して離れていく都会の人。

月代「ちよつと、あなたたち！黙っていく気！？」

花海「いいよ、月代。あたしが悪いんだから」

月代「だって」

花海「いいよ。私は大丈夫」

月代「・・・もう、だからわざわざこんなところで待ち合わせるのやめようって言ったのに」

花海「ごめんごめん、でもたまにはいいじゃない。なんかドキドキするし、私だって来てみたかったもの。渋谷109」

月代「どこがいいのよ、こんな街。店という店からは大音量の音楽とは思えない騒音があふれ出て来て、その前を歩いているのは今日が楽しければそれでいいみたいなの馬鹿みたいな人ばかりだし、だいたい全然バリアフリーが進んでないからさつきみたいなのが」

花海「でもさ」

月代「なによ」

花海「今日が楽しいってことは、一番大事じゃない？」

月代「花海・・・でもやっぱり将来の計画とか、老後のために貯蓄したり」

花海「心配しすぎ。月代の言うこともわかるけど、私は今日を目一杯生きていたい。こうして渋谷だって歩きたいし、ライブだって行きたい。流行りのカフェに並んでパンケーキも食べたいし、洋服だって選んでみたいんだ」

月代「でも・・・心配なの、花海の事が」

花海「ありがと。でも私は大丈夫よ。今日だって一人でここまで」

月代「約束して。私から離れないって」

花海「月代」

月代「おねがい」

花海「わかった。私は月代と離れない」

月代「・・・それじゃ行こうか？何したいの？」

花海「やった！まずはランチして、そのあと買い物！夏服でしょ、欲しいCDもあるし、あとはね、えーと・・・」

月代「落ち着きなよ、花海。1日あるんだから」

花海「そっか！（笑）」

歩いて行く二人。

世を切り裂く謎の影（壱与）。

殺陣2

●転換

買い物袋を抱え嬉しそうな花海。

花海「あー、楽しかった。お目当てのパンケーキは混んでて駄目だったけどね。ありがとう、月代。今日は一日、お疲れ様でした」

月代「何言ってるの。私も楽しかった」

花海「本当！？月代、退屈じゃないかなって心配してたんだ」

月代「退屈なわけじゃないじゃない。花海と一緒になんだから」

花海「どうして？いつも私の面倒見るばかりで、本当は嫌になっちゃってない？」

月代「馬鹿ね。そんなわけじゃないじゃない。花海はね、私にとって太陽なんだよ」

花海「太陽？」

月代「そう、太陽。明るくて、あったかくて、いつでも一所懸命で。私はあなたがいなかったら、輝くことも出来ない月なのよ」

花海「月代、褒めすぎ。だけど私も、月代がいなかったら今まで生きてこれなかったよ。ありがと、月代。大好きだよ」

月代「花海・・・」

回りにいる都会の人々がいつの間にか二人を囲むように見つめている。不穏な空気。

うして月代がこんなひどい目に合わなくちゃいけないの!？」

美古斗「私はこのものではない」

花海「(悲鳴)・・・だれ?まさかまた私たちを!？」

月代をかばう花海。

美古斗「落ち着け。私はやつらの仲間じゃない」

花海「じゃあ誰?これ以上月代に何かしたら、私だって・・・私だって!」

白杖を構える花海。

美古斗「大丈夫。心配するな。私の名は美古斗・・・其方たちの、味方だ」

花海「美古斗・・・味方・・・信じていいの?」

美古斗「信じてくれ」

花海「・・・それじゃ、聞いてくれる?」

美古斗「・・・聞こう」

花海「私ね・・・何も出来なかった。月代が必死に戦ってる時、何も出来なかったの(泣)」

美古斗「・・・」

花海「月代は小さい時からいつも私のそばにいてくれた。どんな時も、何があっても私を支えてくれた。マラソン大会だって、本当は足だって早いのに、私と一緒にゴールしてくれた。点字も覚えて交換日記してくれたり、二人乗り自転車で海まで連れて行ってくれたこともあったの・・・そんな月代が・・・月代がピンチの時に私何もできなかった・・・。どうして見えなかったんだよ!あの時だけ、あの時だけでも目が見えてたら、私、月代を助けてあげられたかもしれないのに!バカ・・・私の馬鹿!月代、ごめんね(大泣)」

美古斗「もう泣くな。泣いている暇などない。助けに行くぞ」

花海「・・・え?」

美古斗「月夜見を助ける。私はそのために其方(そなた)を迎えに来た。彼女を助けられるのは其方だけだ。さあ、私と共に行こう」

花海「・・・行くなって、いったいどこへ?」

美古斗「まほろばだ」

花海「まほろば?」

美古斗「其方は特別な力を持っているんだ。彼女のマブイを取り戻し助け出すためには、奴らを倒すしかない」

花海「・・・月代を助けるためなら私なんだってする!命に代えたって」

美古斗「よし、行こう。いざ、まほろばへ!」

M-2 黄泉平坂の舞

暗がりの中の美古斗と揺らめく行燈の光。

●転換 光に包まれて〜暗転

◇其の三

まほろば。美古斗に手を引かれながらついてくる花海。(衣装:まほろば仕様)
目をきつく閉じている。

美古斗「どうかしたか？」

花海「なんだか・・・凄くまぶしかった気がして少し怖い。変だよ、見えないのに・・・」
美古斗「黄泉比良坂（よもつひらさか）を通ったからな。あそこは二つの世界を死者たちがむやみに行き来しないよう、特別な光で満たされているんだ。さあ、ゆっくりと目を開けて」

花海「え？」

美古斗「大丈夫、ほら、はやく」

花海「でも・・・（ゆっくり目を開ける）・・・え？うそ？・・・どうして？見える！見えるよ！・・・これが見えるってこと？・・・頭で考えてたのと全然違う・・・でもすごい・・・これ、私の手、私の体・・・あれ？なんだか変な服着てる・・・ここがまほろばなの？」
美古斗「そうだ。まほろばは本来、其方がいた場所だから、視力も着物も元に戻っただけだ。むしろ人間に化身している時は、目を見えなくしていたんだ」

花海「どうしてそんなことを？」

美古斗「神の光は目に宿る。呪（のろ）たちはその光を頼りに神とそうでないものを見分けるんだ」

花海「呪？その人たちが月代をあんな目に合わせたの？そういえば確かこう言っていた。人違いはしても、神違いなどするわけがない。お前のその目、神以外の何物でもないだろうって・・・」

美古斗「やつら呪ももとは神だったんだ。しかし己が社も打ち捨てられ、まつりごとも施されず、世を嘆き人間を恨むうちいつしか呪神（のろがみ）に成り果てた。そんな呪たちから其方を隠すために、其方の視力を失くし、神の光を封印していたんだ」
花海「神の光？私が神様？えー！？うそうそ！そんなわけないよ」

そこにキジムナーがやってくる。

キジムナー「ちよんちよんちよんちよん！めんそーれ、めんそーれ！ついに会えたさあ！あきさみよー！わんはうれしいーさー！これでまほろばもーじだね。ティーダ様、にふえーでーびる！」

花海「ちよつと待って、ティーダ様って・・・私、花海、水上花海です」

キジムナー「ああ、そう。花海っていうのが人間の時の名前ねえ。かわいいさあ」

花海「ありがとう。でもあなたは誰？」

美古斗「キジムナーだ。沖繩の精霊で、人間の世界とまほろばを歩き来してる」

花海「精霊・・・」

キジムナー「はい、食べる？サーターアンダギー。長旅でお腹すいたでしょう？」

花海「わ、ありがとう」

あまのうずめ、みよりちゃん、しろうさぎが来る。

あまりん「いたいた！太陽神復活の噂、本当だったのね！」

みより「うれしいニャー！なつきたーい（ゴロゴロ）」

うさぎ「遠路はるばるご無事で何より（泣）」

花海「わ！え！？あなたたちだれ？いったいなに？」

あまりん「忘れちゃったの？それじゃ改めて私から自己紹介しましょー。私の名は天細女

命（あまのうずめ）。むかーし昔、あなたが天岩戸（あまのいわと）に隠れちゃったとき、私の踊りを見て岩戸から出て来たのよ。それも覚えてない？」

花海「ぜんぜん」

あまりん「まあ、あれは初代の憑代（よりしろ）の話だからね。ま、いいか。私、踊りが得意なの。芸能の神様として祭られてるのよ。でも祭られるより、もっともっと人気者になりたいから只今、アイドル活動中！あまりんって呼んでね」

キジムナー「あまりーん！」

あまりん「ありがとう！うふふ。サイン欲しい？」

花海「ええ・・・あとでお願いします」

あまりん「いいわよ。御朱印帳持ってる？」

花海「御朱印帳？持ってないけど・・・」

みより「わたしは猫の神様よ。宮城県の田代島っていう小さな島に」

花海「あ、たしかネコがたくさん住んでる島でしょ？」

みより「ご名答。そこにある猫神社の祭神やってます。本名は美興利大明神（みよりだいまようじん）。大明神っていうのがちよっと大げさではずかしいでしょ？だからみんなには、みよりちゃんって呼んでもらってまーす。ふあ、なんだか急に眠くなってきちゃった。ちよっと失礼」

花海「え、寝ちやうの？」

キジムナー「いつものことだから。ネコはきまぐれさあ」

うさぎ「私は白兔神（はくとしん）。因幡の白兔ってご存知ですか？」

花海「知ってる！あのワニザメを並べて海を渡ろうとした」

うさぎ「結局は失敗して丸裸にされちゃったのですが（しくしく）」

キジムナー「あ、また泣いてる。この子はすぐに泣くのが玉に傷ねえ。だからいつも目が赤いのよ」

あまりん「あ、サクヤヒメ様よ」

花海「サクヤヒメ？」

美古斗「木花咲耶姫（このはなのさくやひめ）、富士山のご祭神だ」

サクヤヒメが現れる。

M-3 まほろばの歌と舞

●暗転

◇其の四

壱与の館。繋がれた月代（衣装…まほろば仕様）。それを囲む夜刀、狐狗狸、雷獣、表滑。ゆっくりと現れる壱与。

壱与「月夜見。ずいぶん手こずらせてくれたね。よくもこそそと逃げ通してきたもんだよ。その気概はほめてあげなくちゃね。お前たちも見習いな」

夜刀「はい」

壱与「それで、奴はどこにいる？と言っても、白状するわけがないか」

夜刀「私たちもそう考えて、こいつのマブイを奪ってまいりました」

壱与「おう、そうか、よくやったね。どれ、よく見せておくれ」

夜刀「こちらにございます」

壱与「なんと美しいマブイ。さすがは月夜見尊のマブイだ。このままたいらげてしまいたいくらいだね」

狐狗狸「壱与様、ご辛抱を。これは奴をおびき寄せ、対峙した時の大事な切り札」

壱与「わかっている。それまでしつかりおもりするんだよ」

夜刀「はい。表滑」

表滑「はい」

マブイを持ちそこね落としそうになる表滑を打ち付ける壱与。

壱与「貴様、何をしている！そのマブイにどれほどの価値があるか分かっているのか！」

表滑「申し訳ございません！大切なものと思えば思うほど手が震えて」

壱与「言い訳などよいわ！まったく、貴様のように醜い面相のものを従がえているのはね、流行病をまき散らす醜悪な妖怪ゆえに行く当てもなきゆえ、忠誠を誓うと思えばこそ。マブイひとつまともに守れぬようならば、早々にここを立ち去れ、うつけ者が！」

表滑「お許しを！どうかお許しを！」

立ち去る壱与。

夜刀「狐狗狸、新月が近い。次のご祈祷の生贄は準備できているのか？」

狐狗狸「ああ」

夜刀「どこの神だ」

狐狗狸「いや、神々は壱与様を恐れて皆まほろばの奥深く身をひそめてしまい、いまやなかなか姿を見せない」

夜刀「では」

狐狗狸「人間だ。ユタの一家の兄弟に目星を付けた」

夜刀「・・・仕方がないか」

狐狗狸「とにかく急ぎ、天照（あまてらす）を見つけよう」

うなずき立ち去る夜刀と狐狗狸。

雷獣「だいじょうぶか？」

表滑「ああ、もう慣れた」

雷獣「私は慣れないな。あの方の怒りは本当に恐ろしい」

表滑「おらだつて恐い。でも姿かたちの醜さをのしられることには、すっかり慣れたよ」

雷獣「表滑」

表滑「おらがいるところには流行病が蔓延してしまう。おらがそうしたいわけじゃないのだ。だからおらは居場所を転々とするしかなかった。だけど、壱与様はここにいらつてくれた。はじめて昨日と今日の寝床が一緒の生活をする事が出来たんだ。おら、それだけでうれしい」

雷獣「あんな仕打ちを受けてもか」

表滑「それでもだ。ののしられるのは悲しいけれど、さみしくはないからな」

月代「駄目よ・・・目を覚ましなさい」

表滑「わ！しゃべった！」

雷獣「お前、いつの間に」

月代「騙されちゃいけないわ。あなたたちはあいつに心を操られているだけよ」

雷獣「しゃべるな！しゃべるんじゃない！」

月代「あいつはあなたの心の弱さを見抜いて、言葉巧みに自分の都合のいいように従わせているだけ。あなたはのしられることで服従し、依存しているのよ。目を覚ましなさい！いい、よく聞いて。あなたは醜くなどない」

表滑「やめろ！やめてくれ！」

雷獣「いいかげんにしろ！」

月代を殴打し気絶させる雷獣。

雷獣「(荒い息)」

表滑「(荒い息) 雷獣……こいつ、おらのこと、醜くないって」

雷獣「表滑！……しつかりしろ……」

表滑「……」

●暗転

◇其の五

まほろば。※まほろばの歌ラストの続き。

サクヤヒメ「その女の名前は壱与」

花海「壱与？」

サクヤヒメ「(うなずき) 壱与は人間にして人間にあらず。神を殺しそのマブイを喰らうことによって妖力が身につくことを知ってしまった。そしてある目的のために始めたのが、神狩り」

花海「神狩り……神様を狩るという事？なんのために？」

サクヤヒメ「自らが神になるため。神を殺し喰らい続けた壱与はもはや時空をも超越する存在になってしまった。我がまほろばさえも恐るるに足らず、好き放題の悪行三昧」

花海「時空を超える……どうしてそれほどまでに」

サクヤヒメ「壱与はあるとき知ってしまった。母、卑弥呼の秘密を」

花海「卑弥呼って……あの邪馬台国の卑弥呼が母親なの？秘密っていったい」

サクヤヒメ「邪馬台国を治めた卑弥呼には不思議な力があつた。それはまるで人間とはかけ離れた力だった。雨を降らせ、災いを予見し、病を治した。そしてそのことよって人心を操った。その力がどこから来るものなのか、卑弥呼は死の間際、娘の壱与に引き継いだ」

花海「壱与は母親の死を看取ったの？」

サクヤヒメ「そう。なぜなら、卑弥呼を殺したのは壱与本人だから」

花海「え！自分の母親を殺したの？」

サクヤヒメ「(うなずき) その時、卑弥呼はこう言った。国を治めんとするならば、我が母の屍を喰らいアヤカシの力を授からん。それが国を守ろうとする頭首の断末魔だったのか、殺されようともわずかに染み出る(しみいずる)母の愛だったのか」

花海「ひどい話ね・・・」

サクヤヒメ「母親の神がかりの血を受け継いだ壱与は、その時から神になるために、数多（あまた）の神を殺し喰らってきた。しかしどんなに多くの神を喰らおうとも壱与は神になれなかった。神になるためには太陽を司る天照大御神（あまてらすおおみかみ）のマップイが必要だった。それがお前よ。花海」

花海「わたし！？太陽を司る神ってなによそれ、わたし、知らない、そんなの嘘だよ！」
サクヤヒメ「新月の夜が明け日出る時、お前のマップイを草那芸之大刀（くさなぎのつるぎ）により二つに断ち、喰らいつくすことで奴は神になる」

花海「やめてよ、そんなの冗談じゃない！」

美古斗「もちろんそうさせるつもりはない」

花海「偉そうに言わないでよ、だいたい私と月代に何の関係があるのよ！」

サクヤヒメ「ではお前は何のためにまほろばに来た？」

花海「それはその人が、美古斗と一緒に月代を助けようって、だから」

サクヤヒメ「月代の本当の名は、月夜見尊。お前と正反対の、夜と月を司る神。月夜見はお前を守るために、人間に化身し常に行動を共にしてきたのよ」

花海「え？月代が？」

美古斗「わたしたち神側は、どうしても太陽神である其方を守る必要があったのだ。其方が消えてしまえば、すべてが暗黒の闇に落ちる。そのために、其方のマップイを人間の憑代に降ろし隠したのだ。神の光が宿る瞳を、記憶と共に封印して」

キジムナー「かわいそうだとは思ったさあ。目が見えない不自由な生活を強いるわけだからねえ。でもティーダ様のマップイを守るためには仕方なかったさあ。自分の素性を知っていたら、ティーダ様の事だからじつと隠れてはいないだろうしねえ」

花海「憑代ってなに？」

美古斗「憑代は簡単に言えば入れ物だ。神も人間も姿かたちは入れ物に過ぎない。マップイだけがその者の本当の姿だ。三上花海という入れものに、天照大御神のマップイを隠したのだ」

花海「じゃあ、私はだれ？花海じゃないの？っていうか天照（あまてらす）？あー、もうわけわかんない！ねえ、教えて！私は誰なの！？」

サクヤヒメ「花海であり天照大御神。それを見極めるためにも、月夜見のマップイを取り戻し、壱与を倒さなくては。みな力を集結し、奴が神になるのを止める」

美古斗「そのためにはまず、やつらの居場所を見つけ出し、奪われた草那芸之大刀（くさなぎのつるぎ）を取り返す」

花海「草那芸之大刀（くさなぎのつるぎ）？」

美古斗「（うなずき）その剣だけが神を殺すことが出来るのだ。やつはそれを・・・私から奪った。神になりつつある壱与を殺すことが出来るのも、おそらく草那芸之大刀だけだ」

● 転換

◇ 其の六

齋場御嶽（せいふあうたき）。ぼんやりしている花海。心配げに掃除をしているキジムナー。

花海「海が綺麗・・・まほろばっているんな所と繋がってるんだね」

キジムナー「世界中の御拝所（うがんじよ）や神社とつながってるさあ。ここは齋場御嶽。

沖繩一有名な御拝所ねえ」

花海「うがんじよ？」

キジムナー「そう。拝む場所ってこと。ユタがここに神様をお招きして拝むわけさ。時には未来を占ったりもするけれど、神主さんとお坊さんの両方の仕事をするのが沖繩のユタの仕事さあ」

花海「キジムナーは何してるの？神様じゃないんでしょ？」

キジムナー「うーん・・・うろろうしてるさあ」

花海「うろろう？」

キジムナー「そう、うろろう。沖繩はあったかいし、すぐに人を信じてしまう優しい島さあ。いろんな人がうろろうしてる。年貢に苦しめられたり、戦争でひどい目にもあつてきた。ソテツ地獄って言ってね、毒のあるソテツを食べてまで命をつないだ時代もあつたのよ。だけど、それでもやっぱ沖繩は美しいよお。だから私はずっとここで、うろろうしてきたいのさあ」

花海「うろろうか」

キジムナー「・・・ティーダ様、元氣ないね」

花海「うん。どうしたらいいのかわからなくて。ところでそのティーダ様ってなに？これ以上、あんまり名前増やさないでほしいんだけど」

キジムナー「ティーダっていうのは沖繩の言葉で太陽って意味さあ。あなたは太陽の神様だからねえ、しかたないさあ」

花海「まあいいわ、どう呼ばれても私は私だから」

キジムナー「強いねえ、さすがさあ」

花海「だって今さら私は私じゃなくて、本当は神さまなんだよって言われても、どうしたらいいのかわからないよ」

キジムナー「そうね、私にもわからないねえ」

花海「もう、無責任なんだから」

キジムナー「うちなーはテーゲー主義よお。それがチムグクル。だいたい神様だって無責任なものよお」

花海「こんな所でそんなこと言っているの？」

キジムナー「神様は願いなんでかなえてくれないしね」

花海「身も蓋もないこと言わないでよ」

そこに人間の汗志売（うしめ）が来る。

キジムナー「あら、誰か来たよ」

花海「うそ!？」

キジムナー「まずいね、今さら居なくなっちゃうのもつれないしねえ。やや!しゃがんじやった!あらら、手を合わせた、あーもうしょうがない、ティーダ様、はい、一礼・・・」
花海「・・・どうしよう」

汗志売「うーとーとう、あーとーとう。うーとーとう、あーとーとう。どうか、わったーワラビをお守りください」

キジムナー「私の子供をお守りくださいだって」

汗志売「私はユタ・久瑠売（くるめ）の娘、汗志売（うしめ）と言います。3日前、娘の

汗奈売（うなめ）と息子の阿止里（あとり）の姿が見えなくなりました。母の口寄せによれば、壱与の祈禱のための生贄として、連れ去られてしまったということです。祈禱は次の新月の夜が明けるあけもどろの時分。なんとしてもそれまでに救い出さなくては、二人とも壱与に命を吸い取られてしまいます。どうか二人をお守りください。どうか……」

花海「あの」

汗志売「わ！」

キジムナー「ティーダ様！そんなところから出てっちや駄目よ！」

花海「だって、かわいそうじゃない。あの、突然ごめんなさい。私は水上花海、それで、えーと、またの名を……天照大御神？……と言います……」

キジムナー「こう見えてすごいえらい神様なのよ」

汗志売「キジムナー？小さい頃には良く見えたんだけど。すごい、来てよかった。ああ、神様。どうかお助けを。うーとーとう、あーとーとう。うーとーとう、あーとーとう。」

キジムナー「話はわかったけど、どうしたらいいんだろうねえ」

汗志売「助けられるならば命は惜しみません。でも私が戦って勝てるような相手ではなし。本当にどうしたらよいのか（泣）」

花海「……よし……戦お」

キジムナー「ティーダ様？」

花海「決めた、私、壱与と戦うわ」

キジムナー「いきなりどうしたの？」

花海「なんでだろう？わかんないけど、私、人のためならやれそうな気がするのよね」

キジムナー「やっぱり神様だねえ〜！」

三人娘が現れる。

うさぎ「やっぱりここにいたー」

あまりん「キジムナー、天ちゃんを一人占めしないでよ！みんなの天ちゃんなんだから」

花海「天ちゃん……また名前が増えてる……」

みより「海久しぶり〜！やっばいいわね、青い海」

うさぎ「白い砂」

あまりん「すてきな音楽」

三人娘「沖繩さいこー！」

M | 4 沖繩音楽 三人娘歌と舞

キジムナー「ところであんたたち何しに来たの？」

みより「いけない！忘れてた」

うさぎ「美古斗様が探してます」

あまりん「天ちゃんに、伝えたいことがあるって」

花海「私に？なにを？」

キジムナー「決まってるさあ」

あまりん「告白じゃない！？」

花海「告白！？」

みより「んなわけないじゃん、こんな時に」

うさぎ「たぶん」

三人娘「戦いの準備です！（太刀をぬきポーズを決める）」
キジムナー「だよね」

● 転換

◇ 其の七

壱与の館。繋がれた月代。見張る雷獣と表滑。そこに汗奈売（うなめ）と阿止里（あとり）を連れてくる夜刀と狐狗狸。

夜刀「変わりはないか？」

雷獣「はい、特に」

狐狗狸「表滑、どうした？」

表滑「いえ！別に、なにも」

狐狗狸「そうか？ならいいが」

雷獣「こいつらは？」

夜刀「次のご祈祷の生贄だ。サーダカのユタの血を引いている」

狐狗狸「場末のよろず神より、よほど益がありそうだ」

夜刀「しかし本丸はやはり天照（あまてらす）。壱与様には早いところ神になってもらわなくては」

狐狗狸「ああ。そのお力でもう一度、我らを神にかえしてもらおうのだ」

夜刀「（うなずき）」

狐狗狸「つないでおけ」

立ち去る二人。

表滑「おい、お前ら、大丈夫か？」

雷獣「馬鹿、心配なんかしてお前本当にどうかしちゃったのかよ」

表滑「だって、まだ子供じゃないか」

雷獣「あのなあ、生贄だぞ」

表滑「わかってるけど」

雷獣「わかかってないだろ・・・まったく、ちょっと見ている。縄を持ってくる」

去る雷獣。

しくしく泣いている兄弟。

月代「ねえ、泣いているわよ」

表滑「・・・ああ」

月代「あなたたち、どこから来たの？」

表滑「おい、勝手にしゃべるな」

汗奈売「・・・弟と二人で隣村の病人に薬草を届けようと歩いていたら、突然あの二人に

つかまって。母さま、心配してるだろうな。帰りたいたい・・・」

阿止里「大丈夫だよ、汗奈売！おいらが必ず連れて逃げてみせる！」

月代「頼もしいわね、坊や。きつと大丈夫よ」

表滑「何言ってるんだ！おらがこうして見張ってるのに、適当なこと言うな！」

月代「あなた、信じてるの？」

表滑「何をだ？」

月代「あいつのことよ。壱与はあなたたちをいいように使ってるだけ。さっきのやつらは呪でしょう？一度、呪神になったものが神に戻れるなんて聞いたことがない。あなたたちだって用が無くなれば簡単にマブイを奪われるだけよ」

表滑「うるさい、お前に何がわかる！」

月代「わかるわ。あなたは自分を認めてくれる存在を探してるだけ。だけど、自分で自分を認めない限り、誰に何を言われようとも寂しさからは逃れられない」

表滑「だって・・・」

月代「言ったでしょう？あなたは醜くなんてない。顔をあげてみなさい」

表滑「・・・おら」

月代「この子たちを連れて一緒に逃げなさい。ここには駄目よ」

表滑「そんなことは出来ないよ・・・壱与様を裏切るなんて」

月代「このままずっと救いのない気持ちで、闇に埋もれてあがき続けるの！？」

表滑「おら・・・おら」

月代「あいつが神になったら、あなたはあいつにひざまずき無限に苦しめられるのよ。永遠にのしられ蔑まれ、罵倒されて身も心も腐り果てていく！」

表滑「ああ・・・おら！」

月代「すぐにここを出て、まほろばに向かうのよ！そうすればきつと」

戻ってきた雷獣に殴られて気絶する月代。

にらみ合う雷獣と表滑。

● 転換

M | 5 命の子守歌 ※サクヤヒメの幻

月に照らされた、繋がれたままの月代。そばには兄弟が眠っている。

そこに表滑が現れる。

月代「どうしたの？」

表滑「・・・逃がす」

月代「え？」

表滑「あなたたちをここから逃がす」

月代「私はだめよ。ここにいる」

表滑「どうして？」

月代「私はやつらにマブイを奪われた。ここから離れることはできないの」

表滑「じゃあどうしたら？」

月代「明け方までもうあまり時間が無いわ。あなたは一人でここを出なさい」

表滑「おら一人で？」

月代「(うなずき) 急いでまほろばに行き、須佐之男尊(すさのおのみこと)を探して。そ

して彼に、私がここにいることを伝えて」

表滑「・・・おら・・・おら・・・」

汗奈売「お願い・・・どうか、弟だけでも助けてください」

月代「あなた起きていたの？」

阿止里「おいらは男だから大丈夫。汗奈売姉ちゃんも弱虫だから、かわいそうだろ？姉ちゃんも助かればおいらはいいんだ。頼むよ、表滑さん！」

表滑「お前たち・・・」

月代「今夜は新月。あなた一人ならまだ間に合うかもしれない。お願い、そうするしかない。二人を救う方法はないわ。須佐之男ならなんとかするはず。お願い行って。早く！」

表滑「・・・分かった・・・おら行ってくる。でも、必ず戻ってくるから」

月代「わかった」

表滑「あのさ・・・」

月代「なに？」

表滑「おら・・・本当に醜くないか？」

月代「ええ。醜いわけなどないわ」

● 転換

M-6 戦いの舞 美古斗と三人娘、そして花海

※舞構成・美古斗ソロ↓三人娘イン↓(セリフ)↓花海イン↓花海居合い(セリフ)

美古斗「いいか、草那芸之大刀を取り返したら、決して油断をするな。

其方があの剣を手にしたとき、何が起きるか分からない。

剣の切れ味は切先ではない、其方の心が決めるのだ」

花海「(うなずく) わかった」

花海の居合い

● 転換

◇ 其の八

老与の館。礎にされた月代。

忍び込んできた花海と美古斗。

月代の拘束を解く美古斗。

花海「月代・・・月代！月代、大丈夫！？・・・よかった！生きててくれたんだね？よかった！」

月代「花海！あなたがどうしてここに！？」

美古斗「すまない。お前のマブイを取り返すためには、こうするしかなかった」

月代「・・・花海、あなた目が見えるのね」

花海「うん、まほろばについてからすぐ」

月代「そう、良かった」

花海「うん」

月代「・・・私達が神だったことも、知ったのね」
花海「うん・・・でもまだよくわからない。私は私のままだし、月代だってこうして月代のままだし」

月代「花海・・・私はもう、今までの私じゃないわ」

花海「うそ。月代は月代だよ。何も変わってやしない。だってほら手だって、髪だって、顔だって・・・月代？」

自分の胸に花海に手を持っていく月代。

花海「・・・鼓動が・・・ない」

月代「・・・マブイを奪われた。今、あなたの目の前にいる私は幻、鏡の中の虚像のようなものなの。マブイを取り戻さない限り、私は神としても、月代としても消えていく」

花海「やだ！そんなことさせない！私を取り返す！月代のマブイ、絶対取り返す！」

月代「ありがとう、花海・・・大好きよ」

花海「私も・・・大好き」

月代「・・・初めて見る世界はどう？」

花海「・・・きれい」

月代「こんな絶望ばかりがあふれて、ココロの壊れた虚ろな世だとしても？」

花海「・・・うん、きれいだよ。だって月代が見えるから。それだけでも私にとって、世界はきれいだよ」

月代「花海・・・」

三人娘とキジムナーが汗志売を連れてくる。

あまりん「さ、こっちよ」

汗志売「汗奈売？阿止里？どこにいるの？」

あまりん「おかしいわね。あの表滑ってやつ二人はここにいてるって」

うさぎ「早くしないと気付かれます」

みより「緊張で逆に眠くなってきた・・・」

キジムナー「馬鹿！こんな時に何言ってるの！？」

あまりん「とにかく手分けして探そう」

みより「うん」

夜刀と狐狗狸が現れる。

夜刀「なにかお探しかな？神々御一行。やっと会えたな、天照大御神。よく見せてくれ、どんな憑代を使ってこの夜刀様をだまし続けてきたんだ？」

狐狗狸「間違いない。神の目だ。しかも飛び切り上等のな」

夜刀「お前、あの時の盲いた女か。くそ、まんまとやられたな」

花海「月代の・・・月代のマブイはどこだ！月代のマブイを今すぐ返せ！」

壱与がマブイの入った巾着を持って現れ、マブイを見せる。

壱与「これの事かい？どうだい？きれいだろ？あとは天照のマブイを手に入れば、私はずいぶん神になるんだよ」

美古斗「壱与！きさま！」

壱与「久しぶりだねえ、須佐之男（すさのお）。あいかわらず男前だけど、威勢だけじゃ私には勝てないよ」

美古斗「うるさい。草那芸之大刀（くさなぎのつるぎ）、返してもらおうぞ！」

壱与「（大笑い）・・・やれるものならやってみな。連れてこい」

汗奈売と阿止里を連れて現れる雷獣。

汗奈売「母さま！」

阿止里「ごめんなさい！」

汗志売「汗奈売！阿止里！無事でよかった！怪我はない？今、助けてあげるからね」

壱与「美しいねえ。母と子の愛ほど美しいものはないよ。美しければ美しいほど、壊してしまわなければならないね！」

阿止里「離せ、チクショー！ぶつとばすぞ！」

壱与「気風がいいね。お前、私の子供にしてやろうか？ねえ？」

阿止里「やなことだ！」

汗奈売「阿止里！」

壱与「あーははは（高笑い）・・・どうした？須佐之男。この子の方が元気があるんじゃないのかい？この子たちの命が惜しければ、天照を渡すんだよ。苦しまないように一息で殺ってやるから。さあ、そいつのマブイをよこしな。草那芸之大刀（くさなぎのつるぎ）を持ってこい！」

剣を持って現れる表滑。

阿止里「表滑さん！」

壱与「ご苦労だったな、表滑。探す手間が省けたよ」

月代「あなた・・・まさか」

汗奈売「嘘ついたの？ねえ・・・助けてくれるって、嘘だったの！？」

表滑「うそじゃない！嘘じゃなかったんだけど・・・やっぱりおら・・・」

月代「また、操られた」

表滑「おら、やっぱり醜いな・・・馬鹿だし、勇気もないし、自分の事しか考えない卑怯者だ。誰もおらを好きになっちゃくれない・・・だからおら、うれしかったよ。あなたが、おらのこと醜くないって言ってくれた時、はじめて人のために何かしようって思った。だけど、だけどおら、どうしても神さまになりたいんだ！」

月代「・・・」

表滑「すごい神様じゃなくていいんだ。ちっぽけなどこにでもいる八百万の神になればそれでいい。嫌われないで、ひとつところの道端で、草の陰で、石ころみたいにニコニコしていらえるような・・・そんな・・・」

壱与「約束したろう？こいつらを連れてこれたら、願いはかなえてやると」

表滑「でもおらやめた」

壱与「なんだと？」

ゆっくり剣の鞘を抜く表滑。

表滑「あんたの言うとおりだよ、月夜見。このまま身も心も腐り果てていくくらいなら、誰かのために死んでいく方がましだ！うあー！」

壱与に突っ込んでいく表滑。

殺陣4

返り討ちにされる表滑。

草那芸之大刀を奪われとどめを刺される。

壱与「醜い上に、ここまで馬鹿だとはな」

雷獣「表滑！」

壱与「なんだ雷獣？きさまも裏切るつもりか？」

雷獣「……………」

壱与が剣を抜こうとするが抜けない。

表滑「この剣だけは、お前にはわたさない！」

さらに体に深く刺し、そのまま剣を奪い、月夜たちのもとへ来る表滑。

表滑に駆け寄る雷獣。

子供たちは母のもとへ。

雷獣「表滑！しつかりしろ！表滑！」

表滑「月夜見……………」

月代「なに？表滑」

表滑「おら…………醜くないかな？」

月代「(うん)…………醜くなんかないわよ。とてもきれいよ」

表滑「ありがとう……………」

死ぬ表滑。

月代「表滑…………おのれ壱与」

表滑のそばから立ち上がる雷獣。

雷獣「壱与ー！」

壱与「どうした雷獣？壱与様だろう？血迷ったか！？」

雷獣「表滑は、たった一人の友達だったんだ！それを、こんな…………こんな……………」

壱与「怖いのかい？でかいのは体だけだね、この臆病者！所詮、お前なんぞ怒りにまかせて雷落とすのが関の山だろう。落としてみなよ。私にお前の雷（いかずち）落としてみるって言うてるんだ！」

雷獣「う…………う…………うあーー！」

叫び声と共に壱与に切りかかる雷獣。
激しい落雷の中、返り討ちに合う雷獣。
表滑の元に来て倒れる雷獣。
声高らかに笑う壱与。

壱与「(笑) おいで！」

殺陣5

切り込んでいく美古斗。

三人娘も戦う。

乱れ飛び交う切先。

そこにサクヤヒメが現れる。

M-8 命の子守歌

美しい歌声に戦いを中断する壱与。

壱与「・・・サクヤヒメか」

サクヤヒメ「悲しい人」

壱与「ふん、もう慣れた・・・人間なんて生まれた時から悲しい生き物だからね。神様のあんたには分からないさ」

サクヤヒメ「そんなに神になりたい？」

壱与「あたりまえさ。死ぬこともなく、不安もなく、人々に尊敬され、ひざまずかれ、祈られそして、愛される」

サクヤヒメ「あなたの母、卑弥呼のように？」

壱与「やめろ！・・・やめろ・・・」

サクヤヒメ「卑弥呼は多くの民に愛された。けれどその代償に彼女は家族を顧みることがなかった。寂しかったんでしょ？小さなころから母である卑弥呼は遠い存在だった。母である前に彼女は、邪馬台国の女王卑弥呼だったから」

壱与「お前に何がわかる・・・母に声をかけられることもなく、抱きしめられることもなく、国を継ぐためだけに生まれ育てられたものの闇の深さが、お前に分かるわけがない！」
サクヤヒメ「だから殺したの？母を独り占めにしたいがために、卑弥呼を殺し彼女を喰らった」

壱与「そのとおり。彼女の妖力を受け継ぎ、国も民もすべては私のものとなった」

サクヤヒメ「それなのになぜ神にまでなろうと？お前にとって神とは何だ？」

壱与「・・・無だ」

花海「・・・無？」

壱与「そうだよ。何も無い、無・・・。お前たち神は究極の無だ。全てを持ちながら何も持っていない。全てあるという事は、何も無いことと同じだ。喜びも苦しみも、未来も過去も、己も他人も命さえも存在しない・・・。だから、神になり全てを手にし、完全な

無を得ない限り、私のこの胸の内に巢食う、この闇から解き放たれることはないんだよ」

花海「・・・じゃあ、私を殺して私のマブイ(?)を食べたら、あなたは幸せになれるの？」

美古斗「花海！何を言ってるんだ！？」

壱与「幸せ？(フツ)なぜわからない？幸せなどというものの自体が不幸を呼ぶんだよ」

花海「そうかもしれないけど！あなたの言う通りなのかもしれないけど、私は幸せをいっぱい感じたいの。嫌なことも結構あるけど、何にもない方が良いなんて、そんなの逃げるだけだよ」

壱与「なんだと？逃げてただけだど？ではお前は逃げないというんだな？」

花海「(うなずく)私を殺していいよ。その変わり、月代のマブイを返して。月代を助けたいの。そのためなら私」

草那芸之大刀を壱与に渡す花海。

月代「駄目よ、花海！」

美古斗「よせ！其方が消えれば、この世界はすべてが闇に覆われてしまうんだぞ！」

花海「いいの。大丈夫・・・壱与さん」

壱与「なんだ？約束しようじゃないか。月夜見のマブイは返してやろう。そろそろ夜が明けるねえ。お前のマブイ、ありがたく頂戴するよ。他に言い残すことはあるかい？」

花海「もう一つ、お願いをきいて」

壱与「・・・言ってみな」

花海「あなたが、天照大御神になってください。私を食べて神になったら、今度はあなたが太陽神になってこの世を照らして」

壱与「お前・・・何を」

花海「大丈夫、怖がらないで。(様子の変わる花海)・・・国を治めんとするならば、我が母の屍を喰らいアヤカシの力を授からん」

壱与「なんだと？・・・貴様、何を・・・」

花海「壱与、全てをあなたに託します」

壱与「やめろ！やめてくれ！」

花海「よくお聞き、壱与」

壱与「いやだ・・・聞きたくない・・・」

花海「我(われ)の命はもう長くはない。我亡きあととはあなたがこの国を治めていくのです。国を治めんとするならば、我が母の屍を喰らいアヤカシの力を授からん！」

サクヤヒメ「卑弥呼！」

美古斗「花海を憑代にした卑弥呼の託宣か！？」

壱与「いやだ、やめて・・・私には母上を殺すなんて出来ない・・・国を守るためにはいえ、母上を食べるなんてことが、出来るわけがないだろう！」

花海「ならぬ！神より奪いし剣(つるぎ)を持って我が命を崩御せしめ、我が邪馬台国を受け継ぐのだ！」

祝詞の声「たかあまはらにかむづまります。すめらがむつかむろぎかむろみのみこともちてやほよろづのかみたちを。かむつどへにつどへたまひ・・・」

花海「さあ、壱与！母の屍を喰らいアヤカシの力を授からん！」

口に何かをほおばったような様子の壱与。嘔吐する壱与。

壺与「やめて・・・いやだ・・・やめてくれー!!」

ふらふらと立ち上がり、自らの胸に草那芸之大刀を突き立て命を絶つ壺与。

壺与「母上——!!」

崩れ落ちた壺与を静かに見下ろす花海。

夜が明けてくる、あけもどろ。

●暗転

◇其の九

まほろば。みんなに見送られる花海と月代。

月代にマブイを手渡す美古斗。

美古斗「お前のマブイだ」

サクヤヒメ「卑弥呼は結局、娘を愛していたのかしら」

花海「・・・愛してたよ。子どもを愛さない親なんているはずない。ただ、きっと、間違えちゃったんだ」

月代「何を？」

花海「幸せの意味を」

キジムナー「じゃあ、ティード様の幸せはなによ？」

花海「一人じゃないんだってこと」

あまりん「一人じゃない？」

花海「目が見えない時、私、本当はすごく孤独だった。自分がどう見られてるのか分からないから。だから私は、一生懸命、人を信じたの。裏切られてもいいから、私に出来ることは信じてただけだって。でもね・・・自分が思ってる何倍も、ううん、何十倍も何千倍も、みんなが私の事を思ってくれてるんだってわかった。その思いがあればどんな困難な時だって、絶対、幸せでいられるはず」

月代「私も、そう思う」

うさぎ「わたしも！（泣）」

みより「ほら、また泣く」

一同「（笑）」

花海「じゃあ、行くね」

美古斗「送ろう」

花海「ありがとう、美古斗」

夜刀と狐狗狸が現れる。

美古斗「貴様ら！」

ひざまずき、刀を差しだし置く、夜刀と狐狗狸。

サクヤヒメ「夢は覚めましたか？」

うなずきあうサクヤヒメと美古斗。

サクヤヒメ「現世に戻った時、今のまま目が見えるのか、それともまた見えなくなってしまうのかは分からない。それでも、帰るのですね」

花海「うん。だって・・・まだほら、例のパンケーキ屋さんも行かないといけないし！」

月代「そうだね。帰ったらすぐ行こう（笑）」

花海（笑）・・・サクヤヒメさん、お世話になりました。みんなも、さようなら」

キジムナー「ティード様ー！（泣）」

花海「泣かないで、今度沖繩行くからさ。そうだ、斎場御嶽で会いましょ。ね？」

キジムナー「約束だよお。あ、汗志売たちも呼んどくさあ」

美古斗「参ろう」

帰っていく花海、月代、美古斗。手を振り見送る神々。

●転換 ※まばゆい光〜暗転

◇其の十

病室。寝ている月代。

目を閉じて美古斗につかまりながら部屋に入ってくる花海。

花海「・・・月夜？」

ゆっくり目を開まし花海を見る月代。

月代「・・・花海」

花海「月夜！月夜、目が覚めたのね！・・・良かった・・・」

身を起こす月代。抱き合う二人。

月代「・・・須佐之男（すさのお）」

美古斗「花海・・・」

花海「・・・なに？」

美古斗「目を開けてみてくれ」

花海「・・・うん」

月代「きつと大丈夫よ。私だっけこうして目覚めたんだし。ね？そうよね？」

美古斗「そうだな、きつとうまくいく。さ、花海、勇気を出して」

花海「うん・・・わかった」

立ち上がる花海。

勇気を出してそっと目を開ける。

満面の微笑みを見せる花海。

花海「・・・見えないや」

月代「・・・」

花海「残念・・・ちよつと期待しちゃった・・・バカみたい」

月代「花海・・・あんなにみんなのために頑張ったのに。どうして・・・」

花海「・・・しようがないよ。これが私。ここが私の居場所だから・・・目も、着るものも元に戻っただけ・・・前のまま、元通りになったんだ・・・月代がいて、私がいる・・・私、それだけでいい」

美古斗「・・・くそっ！」

花海「だから私は・・・今日からまた、今の自分を一日一日楽しんで、目一杯生きていく！だって私は、一人じゃないから。私には、みんながついてるんだから！」

M-9 エンディング曲 歌と舞

●暗転

◇其の十一

ゆっくりついたスポットの中。

目が見えた花海。

おしまい

◇カーテンコール